

『すすき (10/01)』

風にたなびくスキよ
がさがさと音をたて
風にたなびくスキよ
季節はもう秋です

秋の野のスキよスキ
風にたなびくスキよ
十五夜お月様に
がさがさとたなびく

まんまる団子は
月明かりに照されて
スキが風にたなびいて
季節はもう秋です

『男と女 (10/01)』

女は男を
信じられなくなり
人が変わった
男は女を

信じられなくなり
人が変わった

人が人を
信じられなくなると
顔の形まで
変ってしまうのです
女も変った
男も変った
人が人を信じられない
世の中は
これからも
続くのでしょうか
子供のその子供の
づうつと先までも

男も女も人はみんな
帰らぬ日々を振り返る
戻らぬ思いを振り返る
なくした心を見つめている
人はみんな
自分を引かず
明日へと生きる
男も女も悲しいです
遠い昔を振り返り

帰らぬ思いを振り返り
男と女は哀れです

『銀の雨 (11/01)』

男は自分を信じられず
人が変った
女も自分を信じられず
人が変った
男も女も顔が変わって
遠い昔を振り返る

街通りに濡れるは
銀の雨
街路樹が霞むるは
銀の雨
秋の雨は淋しい色
銀の雨は
明かりに照されて
降りにけり
傘をコロコロ転げる
銀の粒

窓に郷愁を流すは
銀の粒
秋の雨は悲しい色
銀の粒は
灯りに浮きて光り
散りにけり

雨が降ります
雨が降る
銀の雨が寒々と
街の通りを濡らします
人の心を濡らします
涙となった銀の粒
ころころころ土の上
銀に染るは通り道

『街灯 (10/12)』

秋の気配の
夕暮れは
どこか淋しく
照されて
なぜか悲しく
照されて

心ほのかに
店灯り

うす紫色に
染められた
秋の日暮れの
野畑には
子供の頃の
なぜか匂う
どこか漂う
思い出よ

秋の気配は
肌寒く
店の灯りが
ほんのりと
人の心を
照してる
なぜか忙しい
夕餉とき

路地の街灯に
ぼんやりと

浮かんだ思い出
懐かしく
急ぐ足下(あしもと)
照された
秋の気配の
あの夕餉路

『男と女 (10/16)』

男と女は悲しいね
アイシヤドーを
手と足へ
マニキュアを
そんな女の姿を
男はただ疲れて
黙って待っている
女と男は
いつしか目で語り
言葉をなくした
女と男は哀れです

男と女は哀れです
灯りに照される
女と男の笑い顔

むつろな声が
風に流され
街を通り過ぎる
マニキヤが手が動き
アイシャドーが光り
女は灯りに流され
男も夢に流されて
男も女も悲しいね

『冷雨(ひやめ) (10/22)』

この涙を
夜風に流せば
心の痛みが
止(や)むと
いうのか

宿ることなき
一度の夢すら
咲かずに
命終わる

生きて一輪
路地の花

風に吹かれて
哀れなり

生きて一輪
路地の花
雨に打たれて
淋しけれ

咲かずに
終わる命なら
夢でも咲きたい
涙なり

『黄昏 (10/24)』

しんしんと冷える
夕暮れになりました
野畑に佇(たたず)めば
人恋しさの夕焼けです
毎年訪れる秋なのに
幾(いく)つになっても
慣れることはないのですね
幼子らは

無邪気な笑顔で指を差し
大人は昔の日々を浮べてる

野火の煙りが立ち昇り
暗闇せまる夕暮れは
人恋しくて泣けてくる
人恋しくて泣けてくる
遠い昔が懐かしく
昔の夢が懐かしく
なぜか涙が流れ落ち
人恋しさも煙りの中に
昔の夢も煙りの中へ
野火の煙りが舞のぼる

『秋夜 (10/27)』

冷える暗闇は
淋しく哀しく佇んで
外灯にじっとしている
人の情を吸込んで
人の情に沁み込んで
涙を冷たくし
心を冷たくし
晩秋の夜が深けていく

暗闇の果ての明かり恋しく
家の灯しびが恋しく
夜の野畑に佇めば
この身の愛(いと)しき人知れず
哀しさも淋しさも行き過ぎて
たったひとりこの世に生き
胸はつまり心は痛む
冷たい夜にたったひとりの生き

『秋陽 (10/27)』

秋の陽って
なんなのでしようね
温もりがあつて
冷たさがあるんですから
私は迷うのです

風がね
木に残った葉を
ひらひらさせているんです
ダンブが通つて
あららら

踏切がチンチンと
閉つて
車も人も止まって
いっぱいいっぱい
並んでいるよ

鶯色の三両電車が過ぎて
やっと人も車も動きだした
道端のコスモスが私に
いっぱいいっぱい
お辞儀をしているのですよ

それはお別れのね
挨拶ですよきつと
だってほーら柿の葉だって
ひらひらとお別れを
しているでしょう

秋の日って
淋しいですね
白い綿雲が
帯のように広がり
青い空が透けて

淋しい中を
鳥が一羽飛んでいる
今度は二羽飛んで行き
秋の陽って
なんなのでしようね

『曇り朝 (10/31)』

曇りの朝は
どこか重たい鉛色
道ゆく人の
カラフルな
響きも沈む佇まい
夢もつぼんで
今にも雨が降りそうな
何やら傘が必要で
曇りの朝は鉛色

曇りの朝は
気持ちも沈んで
何をやるにも
心がのらず

せめてと
朝の食事の華やかさ
でもーね
たった一人が
淋しいね

End all 1994/10